

# 英語教師に求められる英語の基礎能力を保証するための e-learning教材の開発\*

高橋 俊章・松谷 緑

A Web-based Training System for Developing the Skills Required  
by English Language Teachers

TAKAHASHI Toshiaki and MATSUTANI Midori  
(Received February 10, 2005)

キーワード：WBT教材、英語教員養成、英文法

## 1 プロジェクトの目的

本プロジェクトは、英語教育学と英語学の教員が連携し、中学校・高等学校の英語の指導において必要とされる英語の文法知識に関するWBT (web-based training) 教材の開発を試みるものである。学生が英文法や英語の指導に関する情報や知識をWeb上で獲得し、習得内容についての練習を行うだけでなく、Web上のフォーラムで学生相互や教師・学生間で討議や質問のやりとりを行い、最終的には、そのことによる学習効果を測定・評価することを目的としている。

本報告では、プロジェクトの目的と開発したWBT教材の内容・特徴について記述することとする。WBT教材については、稼働を始めて間もないため、その評価については稿を改めて報告することとする。

## 2 プロジェクトの背景とWBTの活用の利点

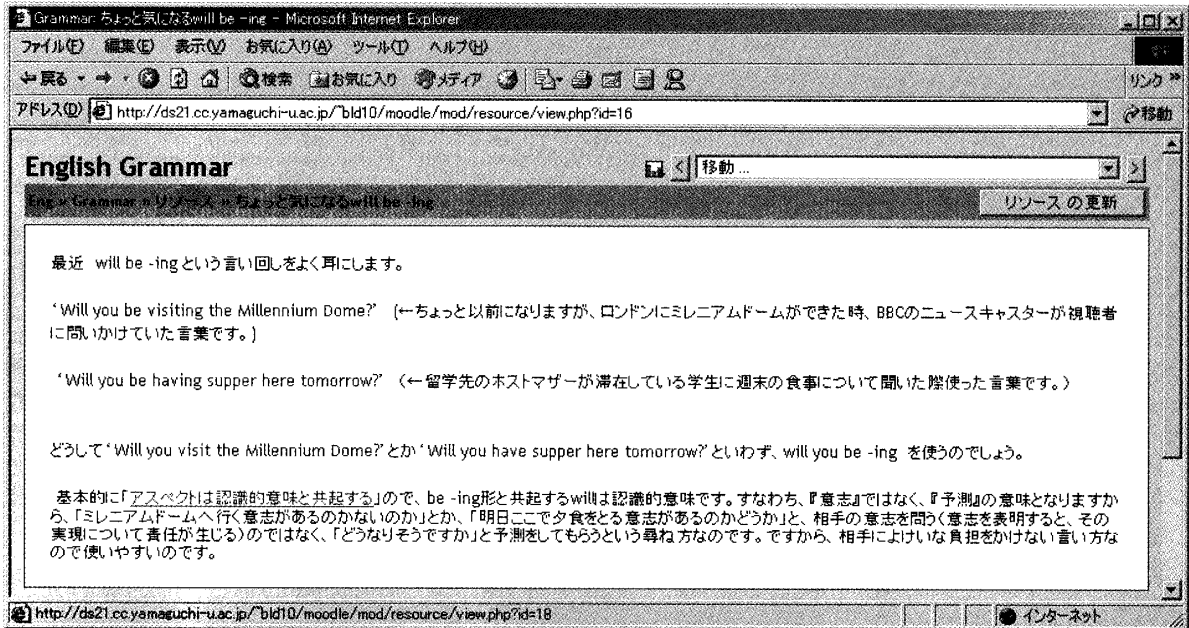
近年、英語の教員になろうとする学生の教授内容に関する知識、特に英語の文法に関する知識の不足が顕著になってきている。そのため、英語教師を目指す学生に対して、如何にして、英文法の基礎的知識と、その指導法に関する基礎的能力を保証するかが重要な課題である。学生も、英語を使う機会が増えると、正しい英文法の知識の不足を身をもって感じるようになり、さらに、自らが教師となって生徒を指導する立場に身をおくことを現実的なものとして考えれば、当然、その文法の知識の必要性を痛感することになる。

山口大学教育学部の英語教育選修のカリキュラムでは、2年次と3年次に英文法の習得と理解・演習のための科目を設けており、基礎的な知識の習得については一定の基準を満たしていると考えられる。ただし、学生の日々の学習活動や教育実習中の実践において生じる当該分野に関連した疑問について、その都度、質問の機会を日常的に設けることは、現状では現実的に不可能といってよい。しかし、理想を言えば、学生が疑問を抱いた時に、問題解決への指導と発展的な学習活動へ向けてのフィードバックを即座に行うことが好まし

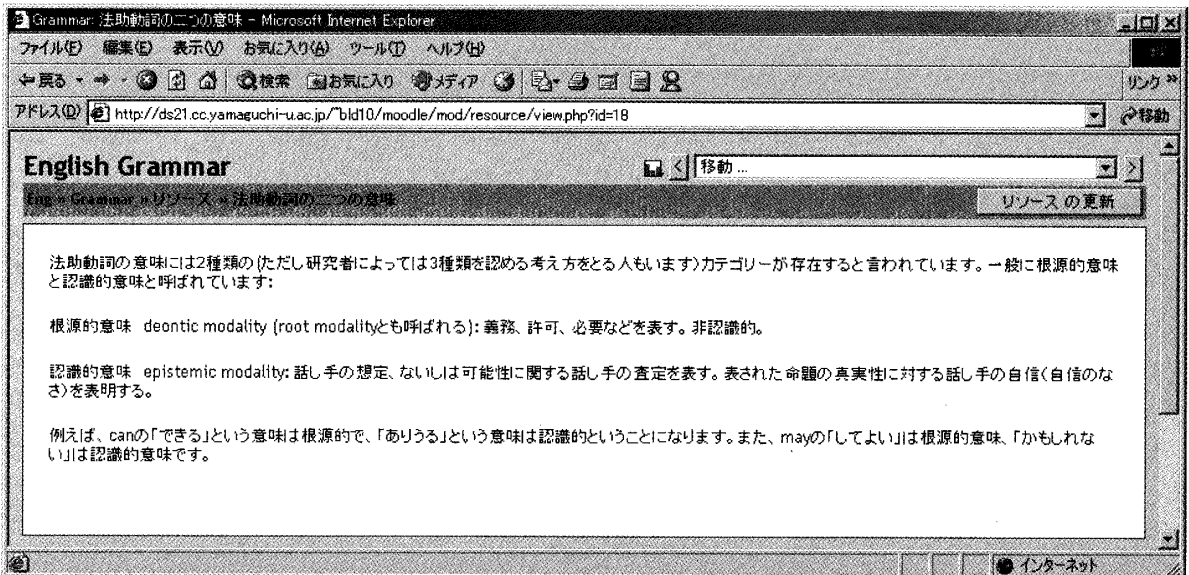
いであろう。その点において、以下に述べるWBT教材を活用することにより、授業外における学生の学習活動をおおいに支援することができると期待している。

また、WBTの魅力は、文法事項を自由に行き来できることである。一般的な英文法の教科書では、例えば、「第1章 名詞」「第2章 冠詞」「第3章 形容詞」「第4章 動詞」「第5章 五文型」「第6章 分詞と動名詞」・・・といったような項目ごとの配置と説明になりがちであるが、Webでリンクさせれば、横断的に展開していくことができる。

例えば、以下は「ちょっと気になる will be -ing」という題目で、「アスペクト」に関して説明したものである。



上の画面の下線部分をクリックすることにより、この説明に関連する「認識的意味」の記述（以下の画面）へ即座にジャンプすることができる。



勿論、項目ごとの的確な知識は必要である。しかし、学生の状況を観察すると、一つの項目で学んだことに対する正解は得られても、別の項目で既に学んだことが活かされていないことが多い。例えば、「分詞と動名詞」の章の問題で、「分詞と動名詞」は正しく使えていても、既に習得していたはずの「冠詞」の使い方を間違えているといった現象もその表れではないかと思われる。単なる学習・練習不足という場合もないわけではないであろうが、それよりむしろ、個々の文法項目の知識を分断されたものとしてではなく、「必要に応じて、総合的に用い、判断する」という意識が学生に欠けていることが原因と思われる。加えて、教育現場において、コミュニケーションの能力が問われる今日においては、正しい一文を生成するにとどまらず、文の意味や機能を理解し、実際に運用することができるほどの総合的能力の育成が必要である。そのためには、言語のあらゆる層において、文法の適格性を判断する能力が教師にも求められる。その意味において、このWBT教材では、例えば、統語構造の説明から、更に、談話構造へリンクし、段階的に、文の適格性を説明することができ、学習者に大いに示唆を与えるものと考えている。

### 3 WBT教材の内容

WBT教材(<http://ds21.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~bld10/moodle/login/index.php>)の作成は、moodle(<http://moodle.org>)というオープン・ソースの Moodle (WBTソフト)を用いて行っている。

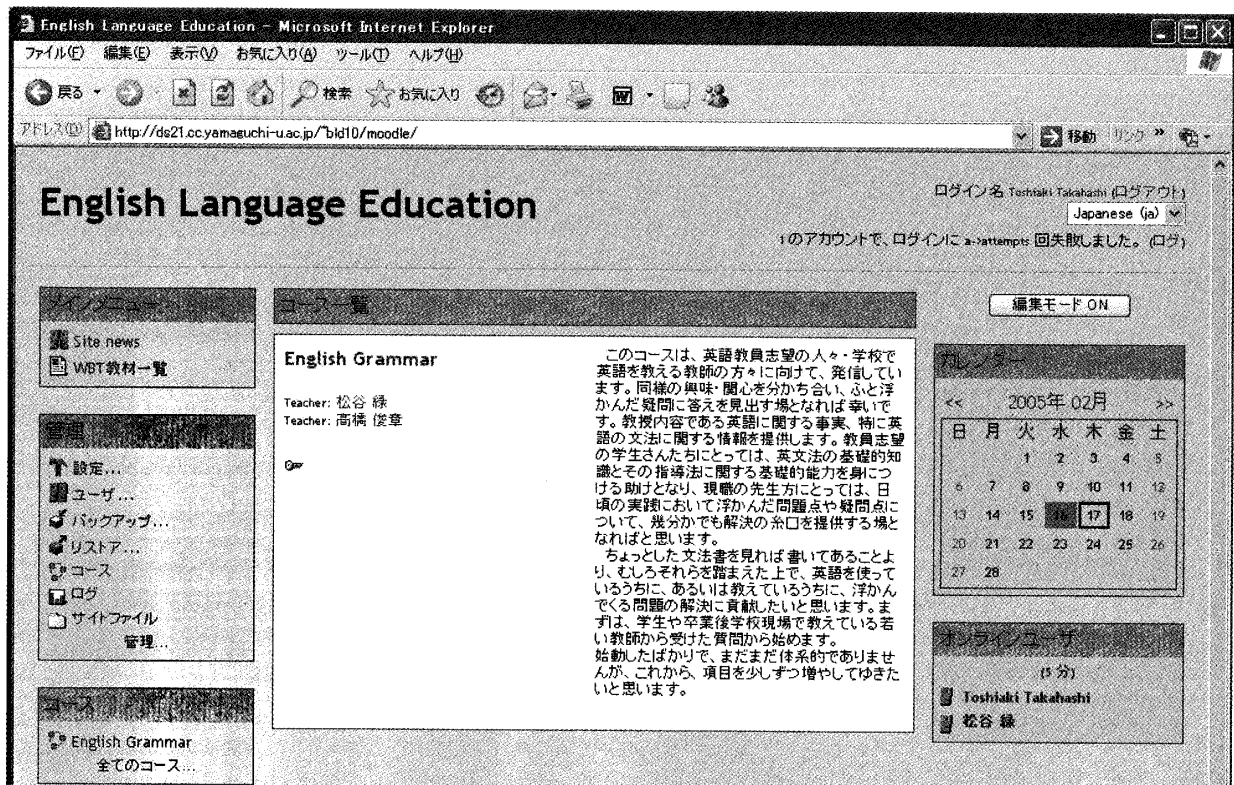
WBTにおける Moodleの活用は、日本ではやっと始まったところであり、授業に活用されているところはまだ数えるほどしかない。山口大学では、経済学部で武本ティモシー氏がこのソフトを先駆的に共通教育の英語の授業に活用されており、今回のWBT教材の設置に関しては、武本氏のHPが大いに参考となった。

また、英語教育の現場において、長嶋(2002)が紹介するようなメールや掲示板を活用した英語の授業はこれまでもよく行われて来たが、今回のWBT教材のように、教員を目指す学生を対象とし、実際に英語を教える際に生じる英語の文法に関する疑問を扱う、双方向的なオンライン教育は他に例がないのではないかと思われる。今回のWBT教材作成は Moodleを用いて行ったが、このWBTソフトはどのユーザーにも使いやすく、多機能である。まず、このWBTソフトには、テストモジュールが含まれ、簡単に確認テストを作成することが可能である。また、テストの採点を自動的に行う機能に加え、挑戦回数や制限時間を設定する機能、各問題に対するヒントや解説ページを作成する機能、テストの出題順序をランダムにする機能が含まれている。

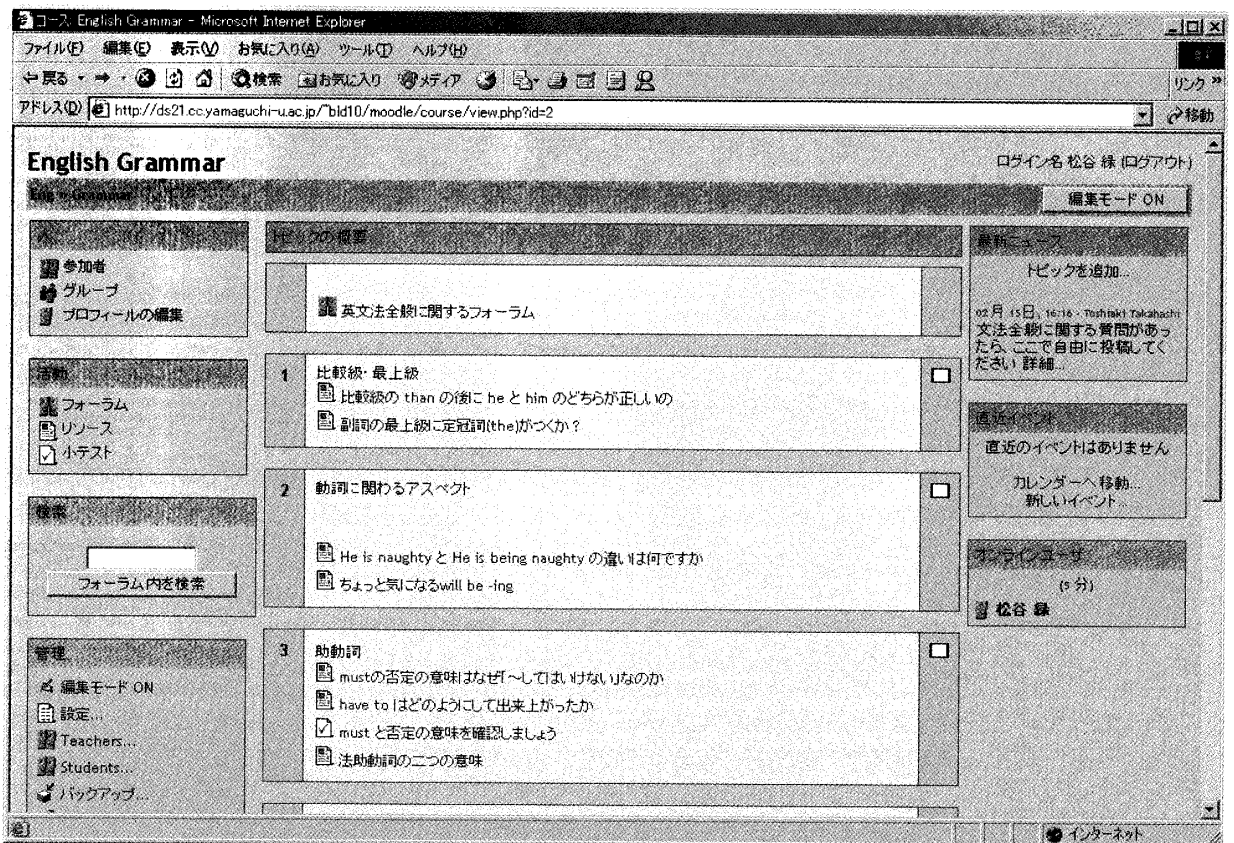
その他、教材のアップロード機能を用いて教材として提示したい文章(ファイル)をホームページの所定の場所にアップロードすることが可能であり、また、フォーラムを設置して、学生や教師間で質問や意見を交換する場とすることが可能である。

さらに、学習者の学習履歴管理機能があり、学習者の解答所要時間、正解率、問題にチャレンジした回数などをWebで一覧出来、また、学習履歴を csv ファイルで出力し、Excelで分析することが可能となっている。



このソフトを用いて作成したのが、以下のページである。




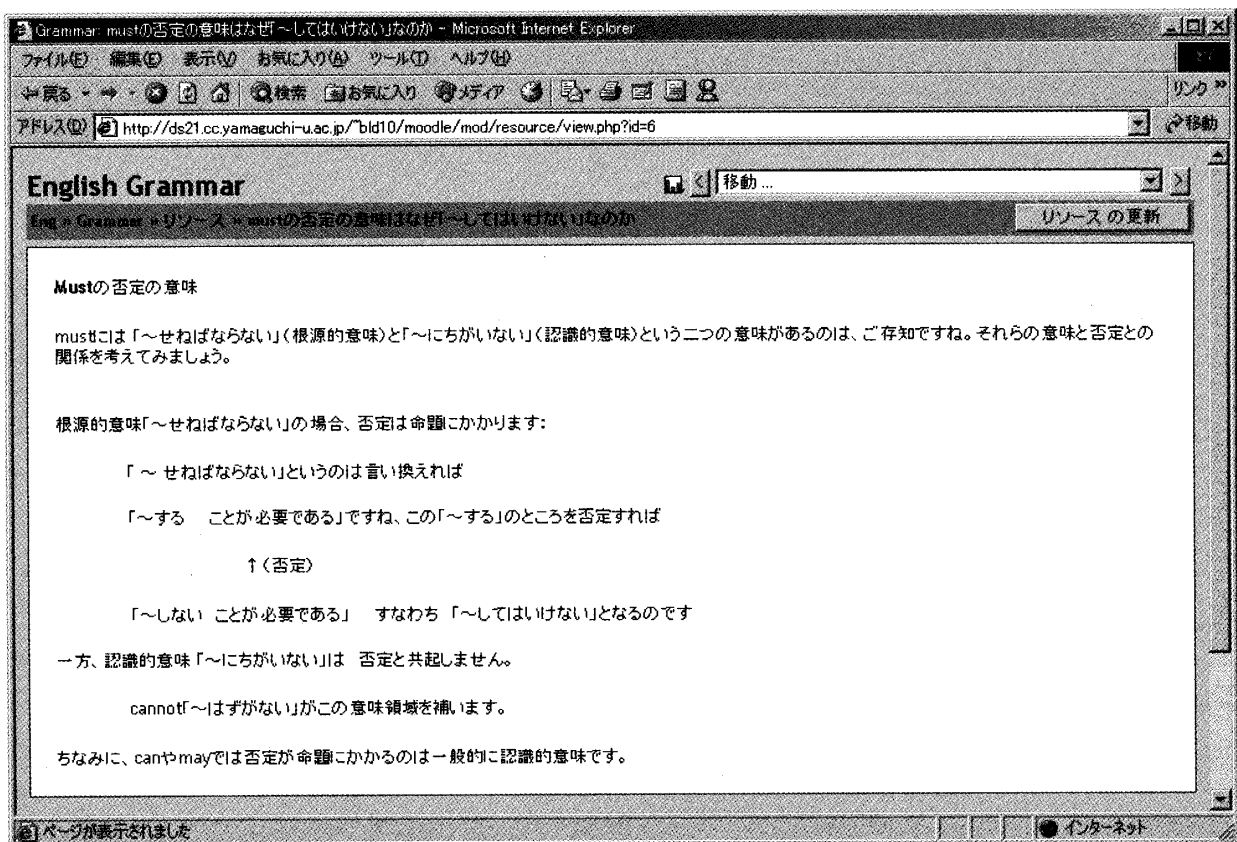
学生はコースの中から、English Grammar を選択してクリックする。すると、以下のような内容（トピックの概要）が表示される。



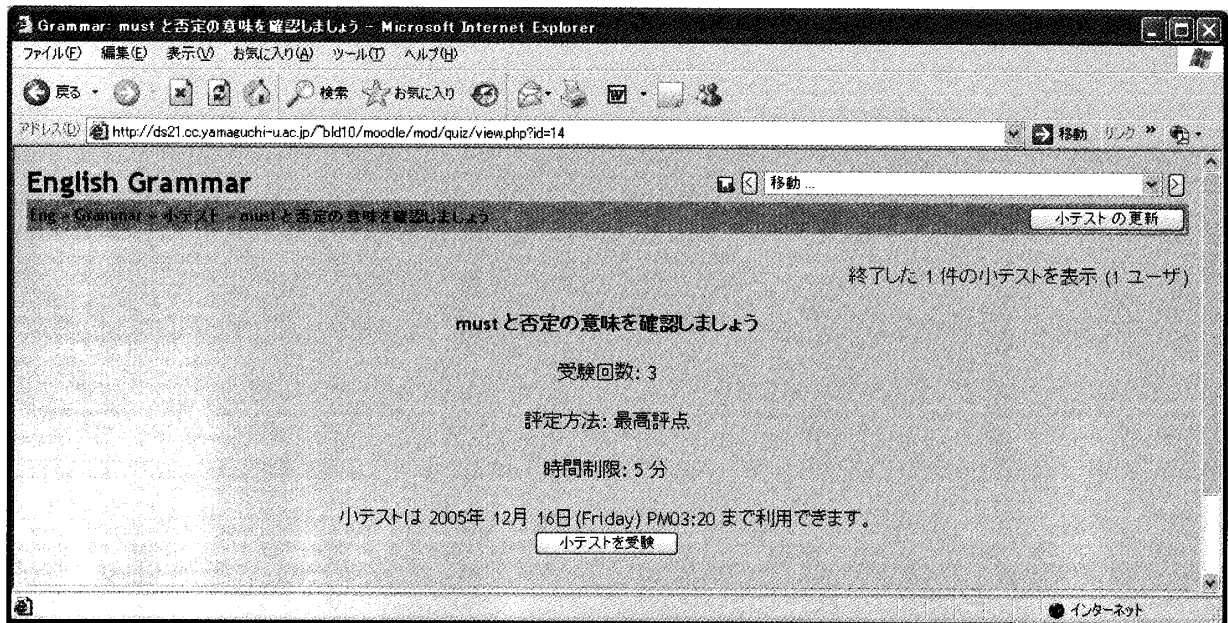
上の画面では見えにくいですが、今回作成したWBT教材は文法項目別にトピックを配列しており、例えば、3番目のトピックは「助動詞」が来ている。そして、このトピックに関しては以下の2つの質問が表示されている。

-  mustの否定の意味はなぜ「～してはいけない」なのか
-  have to はどのようにして出来上がったか

どちらも、2004年度の教育実習を終えた3年生が事後指導の際に教師に尋ねた質問である。このように、学生から出された疑問をもとに、それを解説する文書をトピックごとに配置している。そして質問の部分（例えば、 mustの否定の意味はなぜ「～してはいけない」なのか）をクリックすると、以下のような説明文が画面に表示される。

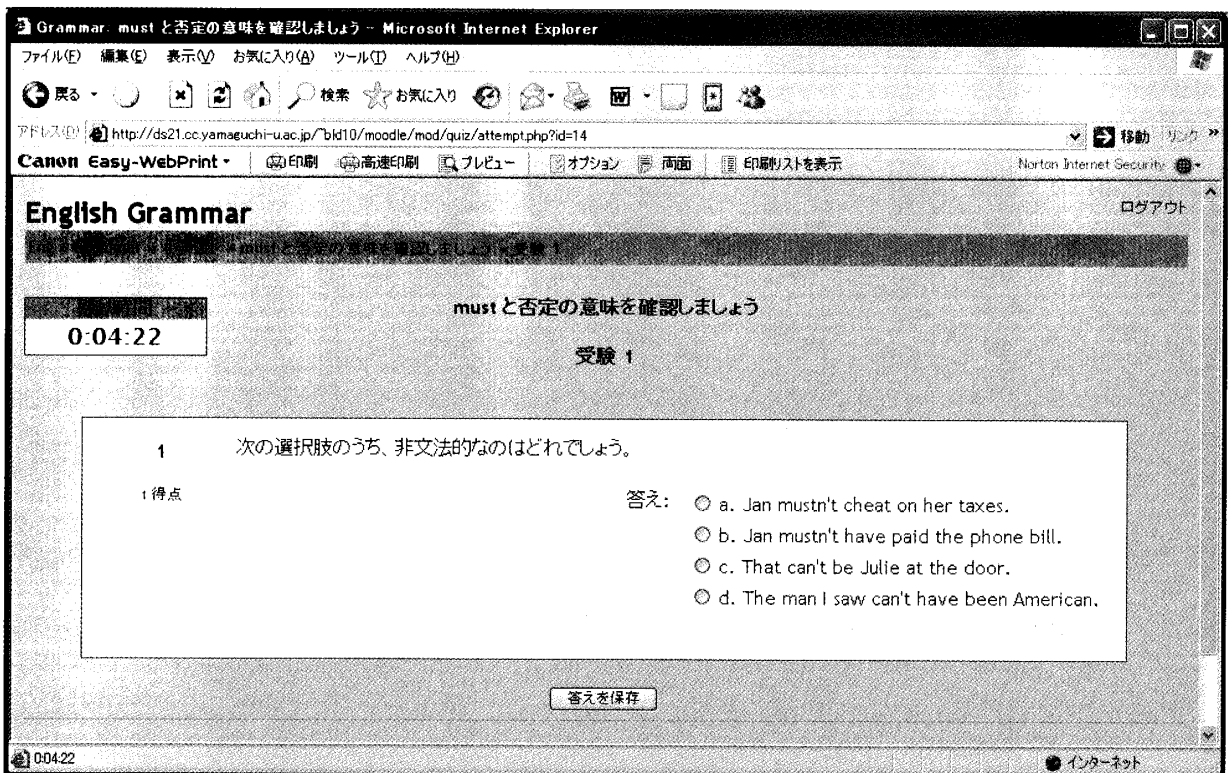


さらに、上記のような説明だけでなく、説明した文章の内容を理解しているかどうかを確認するための、小テストも設置している。例えば、 must と否定の意味を確認しましょう（ ラベルはテストを表す）をクリックすると、以下のような画面が表示される。

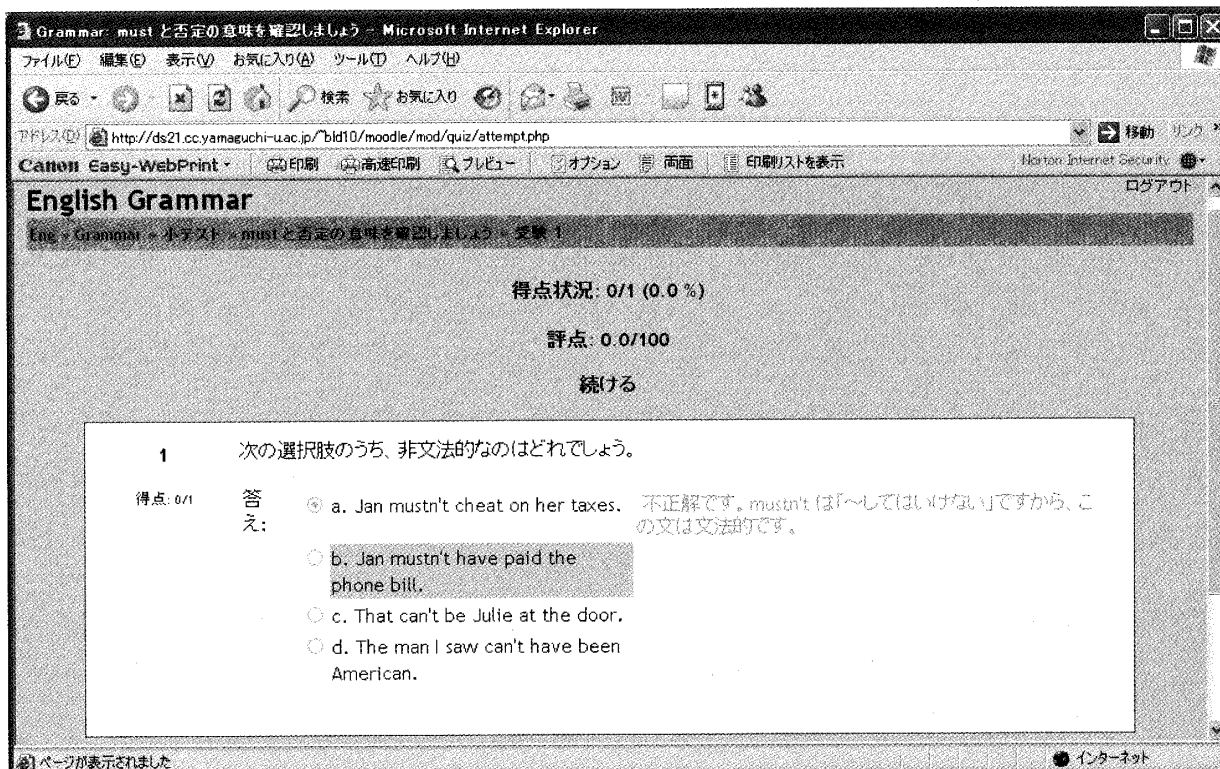




上記の場合、小テストの受験は3回まで、時間制限は5分と設定されているが、受験回数や時間制限は自由に変更出来る。また、上記のテストでは、課題の期限が2005年の12月16日に設定されているが、これも自由に設定が可能である。

次に、「小テストを受験」をクリックすると、以下のようなテスト問題が表示される。



そして、「答えを保存」をクリックすることにより解答を提出すると、次の画面のように正解か不正解かが表示される。また、以下の画面のように、不正解の場合でもその理由が説明される（もっと詳しいフィードバックを表示させることも可能である）。また、上記は、多肢選択式の問題の例であるが、○×式の問題など多くの出題形式に対応している。



最後に、コースの概要のトップにある  英文法全般に関するフォーラム ( はフォーラムの印で、ここでは英文法全般に関する質問をやりとりするフォーラム (電子掲示板) であることを示す) をクリックすると、学生間及び学生と教師間で疑問点を相互にやりとりすることが可能となっている。フォーラムに投稿された文書は、参加者にメールで配信させるため、掲示板を常に注意してみていなくても、どのような投稿がされたか容易に知ることが出来る。そのため、参加者の疑問を学生同士や教師によって随時解決することが可能となっている。また、フォーラムで出された日常の疑問を、さらにトピックの説明に加えていくことで、このWBT学習教材が多くの参加者にとって常に有益な情報を提供し続けていく場となることが期待される。

上で紹介した今回のWBT教材は、以下の点で画期的と考えられる：

- ・ Moodle を利用している
- ・ 扱うトピックと題材が実習を終えた学生の疑問に基づいている
- ・ 説明を英語教育学と英語学を専門とする教員が協同で担当し、英語教育的視点から説明を行っている
- ・ 説明だけでなく、確認テストを提供している
- ・ 説明がハイパーリンク化されていることにより、文法項目に関する知識を総合的に学習することが可能となっている
- ・ 文章説明とテストからなり、情報を参加者が受けるだけの静的なHPではなく、フォーラムを設置していることにより、参加者相互が意見を交換できる動的なHPとなっている
- ・ そして、フォーラムで出された質問に基づいて、さらに扱う題材を拡張していくことが出来るようになっている

まだ、このプロジェクトは始まったばかりである。更に、このページを活用した効果を測定し、その結果に基づいてWBT教材の価値を評価していくことが今後の課題である。

\*本報告は平成15年度山口大学教育学部研究支援経費を受けた「学部教育において英語教師に求められる英語の基礎能力を保証するためのe-learning教材の開発—英語学と教科教育学との連携による教科領域横断的プロジェクトの試み」(高橋俊章・松谷 緑)と題する研究の成果による。

### 参考文献

長嶋昌博 (2002) 『インターネットと英語の授業 インターネットを活用した実践事例』三省堂.

(以下の英文法関係については、引用したページの記述に関連するものに限る。)

Berk, Lynn M. (1999) *English Syntax: From Word to Discourse*. New York and Oxford: Oxford University Press.

Biber, Douglas, Stig Johansson, Geoffrey Leech, Susan Conrad, and Edward Finegan (1999) *Longman Grammar of Spoken and Written English*. London: Longman.

Coates, Jennifer. (1983) *The Semantics of the Modal Auxiliaries*. London: Croom Helm.

Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.

コーツ、ジェニファー (著) 澤田治美 (訳) (1992) 『英語法助動詞の意味論』 研究社.